

プロローグ

——んっ……

息が、堪えきれずに零れた。

リアナは咄嗟に手を口に当てる。湿った吐息が指先を濡らし、そこから熱が逆流してくる。

薄闇に包まれたダンジョン内の休息地。焚き火の名残だけが小さな明かりを残し、横たわる二人を照らしている。男戦士ガレスは相変わらず豪快ないびきを響かせ、女ハンターのミディアは穏やかな寝息を立てていた。

誰にも気づかれない。絶対に。そうわかっているのに、胸の奥は締めつけられるように詰まり、鼓動が速く暴れていた。

まるで内側で渴きを訴える何か、彼女の冷静さをじわじわと侵食していくようだった。

(……なにやってるのよ、私……)

胸の内で吐き捨てた。

嫌悪と羞恥が入り混じる。けれど、手は止まらなかつた。脚を閉じてても、脈打つ鼓動はそこに集まり続ける。

この時間はリアナが仮眠時の見張り番だった。

火の気の乏しいダンジョンの奥。眠る仲間たちの呼吸音が静かに響く空間。

壁際の魔石灯の淡い揺らめきが、彼女の頬を白く照らしていた。その光にさえ、肌がぞくりと粟立つ。

知られたくない。見られたくない。なのに、やめられなかつた。

ローブの裾をそっとめくる。シヨーツはもう、汗と別の熱でしつとりと貼りついてる。浅ましい。そうわかっているのに、体の芯はじりじりと追い詰めてくる。

「……」

指先が、濡れて熱を帯びた布地に触れた瞬間、肩がびくりと震えた。

喉が詰まり、息が止まる。吐き出す代わりに、リアナは片手でローブの端をぎゅっと握りしめた。

石壁にもたれるように背を預け、そっと脚をずらして、布の上からなぞる。

それだけ。ほんのそれだけのはずなのに。感覚が、尖っていた。

(……駄目だって、わかっているのに……)

魔力の熱が、まだ身体の奥に残っている。その熱が、触れられた場所に寄ってく

るように、じわじわと滲んできた。

そつと撫でて、落ち着かせて、それで終わらせるつもりだった。けれど、それは火に薪をくべるような行為だった。

感覚が、異常だった。

布越しの摩擦すら、まるで舌で愛撫されているような錯覚を生む。

息が、浅くなる。喉が乾き、胸の奥が詰まり、体温が脚の間へと吸い寄せられていく。

「……っ、ん……」

こぼれた声が、石壁に反射して耳に戻る。それがまるで他人の喘ぎのように聞こえて、背筋が凍る。同時に、背中を撫でられたような、全身に駆け抜ける快感。

スカートの中が、じんわりと濡れていく感覚に変わっていく。思わず、脚がかすかにすり合わさる。

そのときだった。

——ごろん。

背後で、ガレスが寝返りをうった。

「……！」

心臓が跳ね上がる。息を呑み、手が止まる。全身が石のように硬直する。寝息は、
変わらない。

(……大丈夫……気づかれてない……)

そう思った途端、張りつめていた緊張が、身体の芯に落ちていく。

それはまるで、見られなかったことへの安堵が快感の加速剤になったかのように
だった。

呼吸がわずかに乱れる。汗が、胸元に滲む。指先は、気づけば布地をずらしてい
た。下着の中へ。そつと、音を立てないように滑らせる。

(……ほんの少し、だけ……)

濡れた肌に触れた瞬間、腰がびくと跳ねた。

敏感になった突起が、指に触れて自ら反応する。まるで“触ってほしかった”と
でも言うように。

そつと撫でる。ころがす。震えが、骨盤の奥まで響く。

「く、ん……うっ……」

声が漏れそうになるたび、リアナは唇を噛んだ。それでも、呼吸の端がかすれ、
胸が上下に波打つ。指が止まらない。動かすたびに、脚の内側が熱くなる。

そして、下着の奥、指先がより深くに触れてしまったとき――

(…：…やだ…：…っ)

思考が霞む。奥がふるえる。まるで、子宮の内壁が、誰かに愛撫されたような感覚だ。それが自分の指だと、信じられなかった。

布が湿っていく音が、耳の奥で膨らんだ気がして、息を殺す。「くちゅ」と微かに鳴った自分の音が、背徳感を強めていく。それでも、腰がゆっくり揺れていた。まるで、自分を律することをやめてしまったように。

羞恥が、脳を焼く。けれど、それすら甘い刺激に変わって、じわじわと身体を溶かしていく。

(…：…だめ…：…なの…：…っ)

鼓動が暴れ、視界が揺らぎ、理性は渦の奥に沈んでいく。

もう、なにかが壊れるのを待つしかなかった。

――あ、あ…：…っ。

かすかな声が、深い闇にほどけていく。

羞恥と快感が絡み合い、リアナの意識をとろかしていった。

…：…どうして、こんなことになったのか。

ほんの数時間前まで、自分はいつも通りだったはずなのに――。

第一章

カウンターの端。少し欠けた木椅子に腰を下ろし、リアナは杯を傾けていた。癖のある香草酒が喉を刺し、眉間がわずかに寄る。それでも不快ではない。静かなのは、自分の内側だけだった。

黒を基調としたローブは編み上げて締められ、胸元からは光沢あるインナーがのぞく。腰から下には深いスリットが入り、椅子に浅く腰かけると片脚が自然に露わになる。だが本人に露出の意識はなく、動きやすさと詠唱時の集中のため――ただそれだけだ。

長い銀髪が肩から背へ流れ、青みを帯びた瞳は杯の中を映す。指先は無意識に縁をなぞり、誰とも目を合わせず、誰にも声をかけない。

その姿は酒場の喧噪の中でひとときわ異質で、孤高な気配をまもっていた。だからこそ、掛けられた声が少しだけ耳に刺さった。

「ねえ、その…魔法使いさん」

淡く掠れた声。明るさの裏に、微かな緊張がにじんでいる。顔を上げると、二人の冒険者が立っていた。

一人は大柄な男。短く乱れた髪に日焼けした肌、顎には無精ひげ。荒々しい風貌に似合わず、瞳はどこか穏やかだった。高身長で鍛え抜かれた体を軽鎧に包み、背には大剣を負う、頼もしさをまとった男だ。

もう一人は女。栗色の髪を高く結い上げた、快活そうな弓使い。目元は柔らかい茶の瞳。背には弓、腰には狩猟用の短剣。旅の泥がまだ靴に残り、軽装の下のようなやかな体軀からは、抜け目のなさが漂っていた。

「えつと……リアナ、だよね？ ギルドの掲示でよく見る名前だったから」
女が声を潜めるようにして言った。声には親しみを込めていたが、どこか探るような抑揚も混じっていた。リアナは答えなかった。

少しの沈黙。視線の交差が空気を震わせる。そして男が一步、前に出た。

「魔法使いだろ？ 少し、話があるんだ」

無遠慮な口ぶり。だが、必要以上の威圧は感じない。杯を置くと、静かな音が木のカウンターに響く。リアナはそのまま顔を上げ、短く返した。

「……内容と報酬だけ」

男は短く頷いた。隣の女は小さく口角を上げ、目を細める。この雰囲気に怯まな

いあたり、それなりに場慣れしているようだ。

「討伐依頼だ。東の断層谷にある洞窟で、魔族が巢をつくっている。昨日、ギルドの連中が一隊潜ったが、戻らなかった」

男の声は低く、けれど無駄がない。言葉数が少ないのに、現地の危険さはそれだけで伝わってくる。

「魔法使いが一人、必要だ」

リアナは少しだけ目を伏せて考える。渋い条件だ。だが、悪くない。少なくとも、無駄話よりはしました。

「報酬は？」

「金貨五枚。前払いで一枚。失敗時は、なし」

「……それでいいなら」

リアナは椅子から軽やかに身を地面に落とす。裾が揺れ、立ち上がると視界が広がった。

二人を正面から見て、改めてその印象を確かめた。

男は、戦士だろう。物腰は柔らかいが、鎧も剣も、ただの飾りではない。

その手に残る古傷と、背筋の伸び方が語っていた。戦場で生きてきた人間の、それだった。

女はハンターか。弓と脚の筋肉の付き方が、それを雄弁に物語っている。

穏やかな表情だが、動きの隙が少なく、獣のような勘を持っていそうなタイプ。警戒はすべきだ、とリアナは感じた。

「俺はガレス。戦士だ。一応、リーダーらしきことをやっている」

気取りのない名乗りだった。力で引つ張るといふより、縁の下で支えるタイプかもしれない。口数は少なく、無駄を嫌うような所作に、律儀さがにじんでいる。

「私はミディア。ハンターだよ……まあ、見た目通りつてことで」

女は唇に微笑を浮かべる。軽やかな声。けれど、その裏に覗く目の鋭さだけは、最後まで油断できそうになかった。

リアナは言葉を返さなかった。ただ、視線だけで応える。無駄な馴れ合いよりも、実力で判断した方が早い。そう思っていたからだ。

「私たちも、即席のパーティーなの。信頼は、これからつてとこ」
ミディアがそう言って肩をすくめると、ガレスが補足する。

「ああ。範囲魔法を使える魔法使いがほしくてね。彼女の弓だと数が多い時にさばききれない。複数の魔族を相手にする可能性が高いからな」

理にかなっている。リアナは頷く。
「使えるよな？」

「当然だ」

自信に満ちた返答に、ミディアがふっと笑った。

「ふーん……私たちの実力は、確認しないのね？」

挑発というより、興味を試すような問いだった。

「戦士の……ガレスといったな。剣と鎧を見れば、場数を踏んでいるのはわかる」
リアナはそう言いながら、ガレスに一瞬だけ視線を向ける。

「私は？」

リアナは答えず、一拍置いて彼女を見た。笑っているが、目は笑っていない。立ち姿に無駄がない。肘の角度、肩の緩み、腰のバランス。すべてが矢を抜く直前の“待機”を前提にしている。

「……髪は結いっぱなし、爪は短い、弓の握り方に指の厚み。笑顔のつくりが狩人の“それ”だ」

「へ？」

「……見た目は柔和だが、おまえ、弓を持つと性格変わるタイプなんじゃないか？
殺気が漏れているぞ」

ミディアが、息を止めたように沈黙する。やがて、顔を伏せたとしたら、ぱあっと笑顔が弾けた。嬉しさを隠さない、子供のような反応だった。

「うれしい！　ちゃんとかわかってきてくれる！」

そう言うと、彼女はひょいっとリアナの腰の横に回り込む。不意をつくように、リアナの胸元に顔を寄せた。柔らかな髪の手触が肩をかすめる。

「……暑苦しい」

あからさまにため息をつきながらも、リアナは無理に振り払わなかった。驚きはしたが、ここで力任せに拒めば、余計に懐かれる気がしたからだ。

「ごめんごめん。でも嬉しかったから」

ようやく離れたミディアを、ガレスが苦笑しながら軽く引き戻した。それも無言で、だが確実な手の動きで。リアナはそのさりげなさに、少しだけ評価を改める。

「このまま出るか。道中、少し歩すが……」

口調は落ち着いている。戦いの前に必要以上に気負わない、経験者のそれだ。

「問題ない。案内して」

三人の影が、ギルドの扉の向こうへと消えていく。

夜の風は、思ったよりも冷たかった。

それでもリアナは気にしなかった。

必要なのは、静けさと報酬だけ。それさえあれば、あとの煩わしさには目をつぶれる。



洞窟の中は湿り気を帯び、天井から滴る水音が絶え間なく響いていた。足元を撫でるように冷気が流れる。だが、淀んだ空気ではない。通い慣れた気配がある。誰かが、ここを棲み処にしていることは間違いないかった。

「来るぞ」

ガレスが短く告げた刹那、闇の中から唸り声が響く。

ずしりと地面が鳴った。ガレスの剣が、魔物の首元を正確に叩き落とす。踏み込みに一片の無駄もない。頑丈で堅実。重戦士の鑑だ。

その姿を横目で見て、リアナは小さく口元をあげる。

（なるほど……見た目どおりだな。あれで繊細なこともできれば文句ないが……まあ、盾役としては申し分ない）

「援護頼む！」

ミディアの声に殺気がこもる。次の瞬間にはもう、矢が空を裂いていた。

矢の軌跡はしなやかで、それでいて苛烈だ。放たれたそれは、二体の魔物の眼孔を正確に射抜いていた。

一瞬だけ、ミディアの横顔が視界に入る。

普段はふにやりと笑うその目が、今は獲物を仕留める狩人のそれだった。瞳は冷えた刃のような輝きを宿している。放たれた矢よりも鋭いその視線に、リアナはわずかに肩をすくめた。

(……性格が変わるとは思っていたが、まさかここまでとは)

わずかに口元を引きつらせ、リアナは苦笑する。戦場では笑顔などどこにもない。そのギャップこそが彼女の強さの証でもあった。

「次っ！」

ミディアの声が響き渡る。

「左だ。三体来てる」

気配を読むまでもない。空気の揺れで、敵の数も配置もすでにわかっている。リアナは指先をかすかに持ち上げ、風を呼んだ。

囁くような詠唱とともに、虚空を滑る真空の刃が放たれる。

疾風の線が魔物の前脚を切り裂き、続く風圧が足元の動きを奪った。

その隙に、ガレスが斬り、ミディアが射抜く。

流れるような連携。いや、意図的な呼吸合わせではない。ただ、各々が持ち場を理解し、全うしているだけだ。

やがて、魔物の気配がなくなり、三人は一息つく。

「三人とは思えないね、私たち」

魔物に突き刺した矢を笑顔で引き抜きながら、ミディアが笑う。

「ダンジョン攻略に必要なのは人数ではないからな。質が重要だ」

リアナは風を収めながら答える。即席のパーティにしては、悪くない出来だった。ふと視線を横にやると、ガレスが斬った魔物の血を無言で振り払っている。

彼の無骨さに、ミディアの鮮やかさ。そして自分の冷徹さが、意外にも噛み合っている。

（……変な組み合わせだけど、悪くないな）

しばらく進んだ先、洞窟の奥がわずかに開けた。その中心に、異様な気配が立ちこめる。

そこにいたのは、灰色の皮膚に呪紋を刻まれた魔物たちだった。骨のように細い腕と、空洞のように黒く抜けた瞳。ボロ布を纏いながら、杖とも触手ともつかぬ歪な器具を握っている。

「……魔導士型か」

リアナの視線が、自然と鋭くなる。

「数が多いな」

ガレスが低く呟いたその瞬間、敵が一斉に詠唱を開始した。

「魔法くるよ！」

ミディアの警告と同時に、リアナが指先を軽やかに動かす。風が巻く。魔法陣の輪郭が揺らぎ、構成が歪む。次の瞬間、敵の呪文が中空で弾けて霧散する。

弓が唸り、剣が閃く。魔物の身体が倒れ、崩れ、鳴き声だけが残響のように洞窟に残った。

三人の動きに、余計な掛け声はない。

だが、すでに呼吸は戦いの音と一体になっていた。

そして、最後の一体が崩れ落ちる、その刹那。

魔物の喉から、絞り出すような低音が洩れた。

それは呻きにも似ていたが、どこか人間の言葉にも近く、濁った音で意味を成していた。言語としての体裁を保ちつつも、それは呪詛のように、聞いた者の神経をざらりと逆なでする。

【——…ヒト…ノ…タメニ…ホロビヨ…】

声が洞窟の奥へと伸び、石壁に染みつくように残った。直後、魔物の身体が音もなく膨張し、風船が弾けるように破裂する。内側から吹き出したのは、黒く、淀んだ霧だった。

その瞬間、リアナの嗅覚が反応した。

厄介な匂い。魔力に似た、だが魔力とは異なるもの。喉の奥が反応し、吐き気すら催しそうな、不快な混濁。

呪いだ。しかも、ただの呪詛ではない。これは放っておけない類のものだ。

(…：いやな気配)

リアナはそつと眉をひそめ、足元にまとっていた風を止めた。空気の流れを切り、霧の輪郭を見極める。

黒い靄は、ゆつくりと空間に滲み出ていた。広がるのはただの煙ではない。まるで生き物のように脈動し、壁や天井へと吸い寄せられていく。

その波打つような動きに、ゾツとする既視感があった。

(…：このまま、三人で浴びるわけにはいかないな)

「二人とも、私の後ろまで下がれ」

その声は、静かで、そして妙に凜としていた。リアナは一步、前に出た。風が再

び、彼女の足元で旋回する。その瞳はまっすぐに黒い靄を捉え、冷たく、澄んでいった。

銀色の髪をなびかせながら、風の流れを一気に反転させる。

洞窟内の気流が巻き込み、呪いの靄の軌道が変わる。

瘴気はまっすぐに、リアナ一人の身体へと引き寄せられていった。

瘴気が肌に触れた瞬間、リアナの肺がきゅつと縮こまる。視界の端が、ほんのわずかに暗くなる。

(…：…やっぱり、少しくるな)

胸の奥がじんわりと焼けるように熱い。神経が一本ずつ逆撫でされるような、不快な痺れが背骨を伝っていく。

けれど、顔色ひとつ変えずに、リアナはその場に立ち続けた。

「リアナ」 大丈夫か！」

ガレスがすぐに駆け寄ってくる。その動きは迷いがなく、言葉より先に足が反応していた。剣を握る手がわずかに汗ばんでいたのを、リアナは見逃さなかった。

ミディアも、遅れて数歩前へ出る。だが、彼女は矢を握り直したまま動かず、リアナの顔色を注視している。

「本当に？ 具合悪くなっていない？」

リアナは、息を吸い込んで、小さく頷いた。

「……平気。耐性があるから」

声は変わらず、低く落ち着いていた。だがその足取りは、いつもよりほんの少しだけ、静かだった。

数歩の間をおいて、背後でガレスが苦笑混じりに呟く。

「……さすがだな。助かったよ、ほんと」

声は低く、安堵と敬意が混じっていた。

「すごく禍々しい霧だったもんね……ありがとう」

リアナはちらりとも振り返らなかった。

「……気にするな」

ヒールで石床を軽く叩きながら、再び歩き出す。呪いの残滓が、胸の内にまだ少し残っている気がする。身体は重い。感覚も鈍い。けれど、口に出すほどのことじゃない。

（静けさと、報酬。それだけあればいい）

そう思いながら、リアナは足を進める。

彼女にとって必要なのは、戦場の中で崩れないこと。そして、誰にも見せないこと。だからこそ、この歩みが揺れてはいけなかった。



夜は、こんなにも静かだっただろうか。

ダンジョン奥の休息所。ひんやりとした岩肌と、消えかけの焚き火の残り香が暗がりには漂う。壁際ではガレスが豪快ないびきを響かせ、ミディアは小さく丸まって眠っていた。二人の寝息が安らかであることに胸の奥で安堵しつつ、その静けさが逆に焦りを煽った。

喉が渴く。息が浅い。心臓の鼓動が、脈打つように身体の奥を揺さぶっていた。
「……はあっ……なんだ……？ 身体が……熱い……」

額に浮かんだ汗が、頬を伝って冷たい。なのに、体内から立ち上る熱はそれ以上にやけつくようだった。脇腹、太もも、うなじ。衣擦れすら刺激に変わる。呼吸のたび、布の中の肌がびくりと反応した。

おかしい。明らかにおかしい。
(……あの時の呪いか……?)

戦闘で浴びた黒い瘴気。外傷はなかった。耐性も、鍛えてある。それなのにどこか、内側に“染み込んだ”ような感覚が消えない。熱はじわじわと、焦らすように下腹を這い上がり、胸の奥で膨らんでは、また波となって戻ってくる。

唇を噛む。だが、熱は収まらない。

(…：こんなもの、に…：)

理性で抑えつけようとしても、意思とは無関係に身体が疼く。

まるで——自分の中のどこかが、目を覚ましたように。

震える指が、無意識に布越しに腿を撫でた。

その瞬間、全身にぞくりとした電流が走る。

「…：つく…：ちが…：やめ…：」

思わず声が漏れそうになり、慌てて唇を押さえた。

誰にも、知られてはいけない。絶対に。

けれど、火照りはもう、ただの熱ではなかった。

自分の中で、欲が疼いている。心とは裏腹に、身体が欲している。

(…：呪いのせい、呪いの…：せいなんだから…：)

自己弁護のように、リアナは目を伏せた。

理性を繋ぎとめようとする。けれど指先は膝の上をすべり、やがて脚の間へと忍び込んでいた。厚い布越しに触れただけで、そこはもう熱を帯びて濡れている。

「んっ……触っちゃだめ……でも……止まらない……」

喉がひくりと震え、唇を嚙む。冷たい岩壁に背を預け、指先をそつと動かす。布越しの摩擦がまるで舌でなぞられているかのように錯覚を生み、息が浅くなる。

「……あ、……ん……っ」

掌で口を塞ぎ、声を殺す。それでも胸が上下に波打ち、吐息が熱を帯びて指先を濡らした。

「指だけで……こんな……」

波が押し寄せるたび、奥がびくと跳ねる。羞恥と快感がせめぎ合い、理性は揺らぎ続けた。

「……だめだ……声……」

——ごろり。

石床に衣擦れの音。ガレスが寝返りを打った。

「……！」

全身がこわばる。今にも声が漏れそうになるのを、膝を抱えて必死に押し殺す。心臓は耳の奥で爆ぜるほど鳴り響き、汗が背筋を伝った。寝息は変わらない。まだ気づかれてはいない。

その安堵が逆に火照りを加速させ、指先が無意識に強く擦ってしまおう。

「はあ……く、あ……んんっ……」

瞬間、胸が締めつけられ、全身がきゅつと縮みこむ。

「……や……もつと……奥が……」

喉の奥からこみあげる声を噛み殺し、肩を震わせる。涙が滲み、すべてを吐き出すように小さく震えて、リアナはその場に崩れ落ちた。

「いや……いやなのに……もう……とまらない……」

背を壁に預け、荒い呼吸を整える。湿った指先がまだ震えている。

「っ……あ……だめ……っ、くる……っ」

腰が浮き、背が反る。唇を噛みきりそうなほど押し殺した声が、堪えきれず零れる。全身が弾けるように強ばり、熱と痺れに包まれながら小刻みに震える。

「はあ……はあ……あ……」

肩を上下させながら、リアナは膝を抱きしめるように身体を丸めた。

「……おわった……？」

かすれた声が闇に溶ける。火照りは少し引いた気がした。冷たい岩肌が心地よく、ようやく落ち着きを取り戻せる、はずだった。

けれど。

胸の奥に残る脈動は、まだ止まらない。さっきまでの甘い痺れが、じわじわと再び疼きへと姿を変えていく。

胸の奥に残る脈動は、まだ止まっていなかった。さっきまでの甘い痺れが、じわじわと芯を搔き立てるように形を変え、再び腹の底を波立たせていく。

「……いや……まだ……熱い……」

息を整える間もなく、再び全身が内側から火照りに包まれていく。羞恥に濡れた指先を見下ろして、リアナはごくりと喉を鳴らした。

自分の手なのに、自分ではない。

動かしているのは、果たして自我か、それとも……。

(……うそ。こんな、すぐに……?)

一度で収まると思っていた。いつもなら、そうだった。たとえ夜に密かに慰めたとしても。間も置かずに、何度も、誰かが隣で眠っているような状況で、また疼き出すなんて。

なのに、身体はもう、覚えてしまっていた。

あの感覚を。あの余韻を。たった一度味わっただけで、熱の残滓が体内を巡り、呼吸を浅くさせる。昂ぶった血流が、今も脈打つように指先へ、足の付け根へ、下腹の奥へ——伝わってくる。

(だめ、だめ……これ以上は……恥ずかしすぎる……)

理性が必死に抗う。だが、その訴えを裏切るようにまた手が、勝手に布の奥へ滑り込んでいた。

ぬる、と濡れた熱を割るように指先が進む。そのぬめりが、現実感を薄れさせていく。触れた瞬間、鋭い閃きのような感覚が腰から背中へ走った。息が止まり、膝がきゅつと寄る。

「んっ……だめ……これ、さっきより……っ」

ほんのわずかに撫でただけで、背筋がびくりと跳ね、下腹の内側がこくんと波打つ。

焦れたような熱が膨張し、また出口を求めて這い上がってくる。

「っ、あ……や、やば……ちよつと、ふ、深く……触ってないのに……」

※続きは本編でお楽しみください。